

---

shabondama

翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

shabondama

### 【著者名】

N4353A

### 【作者名】 翠

### 【あらすじ】

真っ直ぐな瞳の君を見つけた。心の中で声がする・・・「見つけた。」と。1人の少年が街中で「君」に出会う。

いつの頃から僕はシャボン玉が好きになつた。  
あの七色に輝く、小さな球体が。

今日も僕は君を探す。

あの日以来、一度も見ることはなかつたけど、  
初めて見つけたんだ。

僕が自分の力で。

あれは偶然なんかじゃない。

何十個ものシャボン玉の中で特別綺麗な、君の映るシャボン玉を見  
つけた。

名前も知らない君だけど、

僕は言ひようのない愛しさを感じた。

小さい体。きりっとした横顔。長い指。

そして・・・

僕を見つめ返した時の真っ直ぐな瞳。

瞳はどこか哀しげで、それえでいて優しそうで、何よりも「力」があつた。

僕は、自分を誇らしく思った。

心の中で「見つけた・・・」といふ言葉がリピートする。

興奮と喜びと達成感と虚しさと寂しさと悲しみが一気に込み上げて  
くる。

行き交う人ごみの中で僕等は見つめ合つた。

君は視線を逸らさつともせず、動こうともせず、ただ真っ直ぐ僕を見  
据えていた。

僕も少しでも長く君を見ていたかつたから、

君がいつ視線を外してしまいか分からなかたから、

君にいつまでもそこに居ても欲しいと願つていたから、  
動くことも、話しかけることもしなかつた。

抱きしめたい。触れてみたい。声を聞いてみたい・・・

視界が滲む。

僕は泣いていた。

会つたばかりの君を想い、泣いていた。

瞳を閉じる。

君の顔が見える。

もう一度君の姿を見ようと瞳を開くと、そこに君の姿はなかつた。

今日も僕は君を探す。

君と出会つたあの道を通る。

こんな街中でまた僕等が会えるのかは分からぬけど、  
こんなちつぽけな僕が君を見つけられるかなんてそんなの知るはず  
もないけど、

だけどやつぱり、僕は君を探す。

君はもう僕のことなんて覚えてないのかもしね。  
ほんの一瞬、街中で目があつただけの僕のことなんて。  
でも、僕は覚えている。

君の強い瞳に、僕がはつきりと映つたのを。

シャボン玉を飛ばす。

風に巻かれてシャボン玉はたくさんの景色を映す。  
何百というシャボン玉が青空へと舞い上がる。

七色の輝きは何のため？

少し触れただけで割れてしまつ、その小さな体は短い命の中で何を見つけるのだろう。

風に巻かれて割れてゆく・・・

屋根にぶつかって割れてゆく・・・

シャボン玉は減つていいく。

何百個が何十個に。  
何十個が何個に。

あと一つ。

瞳を閉じる。

君の真っ直ぐな瞳と視線がぶつかった。

最後の一つが運んだのは  
温かな一粒の涙だった・・・。

(後書き)

どうでしたでしょうか？

私はこういう出会いに強い憧れを感じます。

いつかそれぞれが「必然」として出会える事を願っています。

\*是非、ご意見・ご感想をお聞かせ下さい。\*

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4353a/>

---

shabondama

2010年10月14日11時57分発行